

『嵐が丘』に観る愛の普遍的概念

山田 隆 敏*

Some generalities of Love in Wuthering Heights

Takatoshi Yamada

要 旨

Catherine の誇り高くて激しい気性、それに引き換え、Heathcliffの飽くことなき復讐への執念、それら両者の激しき激情・怨念が、この作品の全編に亘って流されている。まさに天高く舞上がる「嵐」のように、彼らの根源的な愛の権化に起因する残忍さ・エゴイズム、そして不条理な愚かしさが、全編にあまねく表現されている。善と悪（愛と憎しみ）の相克的な所業が展開され、人間同士のどうしようもない性（さが）の嵐が緑り広げられているのである。このような精神面の矛盾さと、Heathに代表される陰気な自然現象が、一体化されて内容に独特な陰影を与えている。21世紀の今日、この独特な陰影を帯びた作品内容は、我々に力強い衝撃を与え、人間としての生き方そのものについて思考させずにはいられない作品に仕上がっている。また、時間と空間を超越した普遍性に永遠性を与える作品構成に仕上がっているのである。異常な復讐心を有する主人公Heathcliffを登場させることによって、一般的な愛とか執念が、どのように「憎しみ」に転化するかを述べてみたい。さらに、「憎しみ」が愛のジャンルの転嫁であるかを、時代性を問わない森羅万象の普遍的観念論として述べてみたい。

．はじめに

この作品はヒースクリフと幼馴染キャサリンとの「愛の物語」であることはいまでもない。ヒロインであるキャサリンが劇中の途中で亡くなるため、通俗的なあまい「ロマンス小説」といえないのである。事実、34章のうち16章目で彼女の死を迎えるのである。その後の章は彼らの恋の成就を妨げた人間社会に対して、執拗なる復讐劇が展開されていくのである。片思い、恋慕、失恋、憎悪、そして復讐などの一連の劇中劇が展開されてゆくのであるが、このような愛憎の人間模様は、何もこの作品だけに留まらずに現代社会の縮図模様に置き換えて表現しても差し支えないものである。例えば、愛の成就への苦しみ、その後の挫折と失意から生じる精神的内面崩壊、そしてその混沌とした心理状態から生じる異常ともいえる復讐劇の数々などは、「オタク～、萌え～」などの屈折した家庭崩壊社会から生じる現代の負の一側面と、劇中劇の心理要件とが充分に該当すると考える。こういった観点に立脚すれば、「普遍的なる愛と憎しみ」を描ききった作品として、この作品の芸術的完成度は高く評価されなければならない。Edward Morgan Forster

の言を借りれば、この「嵐が丘」は現実性を超越して未来を予言する「予言的小説」¹⁾として評価されているのである。ここに時代性を超越して、現代の社会的案件に合致する心理的観念的な“普遍性”が存在すると考える。

「嵐が丘」の作品評価に関連して、次の4項目が挙げられよう。

1) 作品の背景基盤をなすYorkshire地方の自然描写の卓越さ、2) 作品の登場人物の性格描写の完璧さ、3) 作品構成上の語り手(storytellers)の構成配置と時間間隔を巧みに取り入れた構成上の巧みさ、²⁾ 4) 作品の根幹となる人間関係の対比対照的な組み合わせの妙などが挙げられる。³⁾ これらに加えて、5) 作品の登場人物に、言語表現能力の妙を駆使させた作者Emily Bronteの時代感覚を読む革新さを改めて強調しておきたい。⁴⁾ この表現能力とは、標準語とヨークシャー方言の駆使能力の巧みさであり、また使用する表現語に、心理的要因の陰影を帯びさせる巧みさも強調しておきたい。具体的には知的な社会的立場の者には、「標準語」を、現地で生まれ育った土着の人々には、「地方語」を使用させている。事実、主人公のヒースクリフは、キャサリンとの葛藤の場面で、たびたび微妙なるこの言語表現を使い分けているのである。このようなブーメランの言語感覚は、作者エミリーの時代の潮流を読む社会的通時的感覚性から生まれることを強調しておきたい。さて今回は、「愛の心理的現象にみる普遍的概念」に、現代の生活事象を織り込みながら述べることにする。

・ キャサリンの愛に観る普遍性

Wuthering Heights is the name of Mr. Heathcliff's dwelling. 'Wuthering' being a significant provincial adjective, descriptive of the atmospheric tumult to which *its station is exposed in stormy weather*. <34> ⁵⁾

「この屋敷の位置は嵐に吹きさらしになるのである」⁶⁾

これは世事の煩雑さに飽き、人間嫌いのものにとっての天国の地、“嵐が丘”の自然描写を述べた下宿人ロックウッド氏の言葉である。彼は大都会のロンドンからやって来て、“嵐が丘”の居候となった、第一の語り手(storyteller)となるロックウッド氏の言葉なのである。さらに彼は、第二の語り手(second storyteller)となるMs. Deanの口から次のような言葉を聴くのである。“嵐が丘”の神秘的な内情に関心を持ち、この土地と“嵐が丘”にますます惹き付けられていくのである。

I perceive that people in these regions acquire over people in towns the value that a spider in a dungeon does over a spider in a cottage, to their various occupants; and yet the deepened attraction is not entirely owing to the situation of the looker-on. They do live more in earnest, more in themselves, and less in surface change, and frivolous external things. *I could fancy a love for life here almost possible; and I was a fixed unbeliever in*

any love of a year's standing. < 88 - 89 >

「私は日頃 **どんな愛でも一年とは続くものでない**と信じている人間なんだが、こういう土地では死ぬまで変わらぬ愛なども、ありえそうに思われる。」

この作品は 'Wuthering Heights' の訳名が「嵐が丘」という表現から推測できるように、この物語はヨークシャー地方の広漠として荒涼とした自然を背景に、鬼気迫るほどの「死」を乗り越えて激しく舞い上がる**愛憎無限的な人間の性**を描いている。上記のロックウッド氏の言葉には、彼の都市概念とこの土地の生活感覚から生じるある種の戸惑いと驚きを感じられる。彼の抱いたこの感覚は、今日の世情においても引用できるテーマである。

この作品の特徴として共通して列挙されるのは、次の3項目である。1) 作者Emily Bronteが病弱であり、その病弱さゆえに、世間とは隔絶した日常生活を余儀なくされる点である。2) 作者の生き方は、主人公Catherineの晩年の劇中描写とそっくりの点である。3) Catherineの奔放なる生き方に、添いとげられぬヒースクリフの適わぬ恋が絡みつく。彼らの生き方は、病弱さゆえに告白できなかった作者Emily Bronteの**心情と生き方に合致する**。

どうしようもない人間の性(さが)ゆえに舞い起こる悲劇の眼前に、Heathcliffの黒き頑丈な姿がある。彼を取り巻く出演者たちは、彼の異常な悪魔的な言動と策動によって、人間的な尊厳を傷けられ命を落としてゆくのである。ここでHeathcliffの生い立ちを考証して、Catherineとの恋愛感情に至る航跡を辿ることにする。

This was Heathcliff's first introduction to the family. On coming back a few days afterwards (for I did not consider my banishment perpetual) *I found they had christened him 'Heathcliff's: it was the name of a son who died in childhood*, and it has served him ever since, both for Christian and surname. Miss Cathy and he were now very thick; but Hindley hated him: --- < 65 - 66 >

「その子はヒースクリフという名をつけられていました。それは**幼いうちに亡くなったこの家の息子**の名であったのですが、～」

「悪魔様のたまもの、ジブシーの子、拾い子、陰気だがまん強い子、父のない可哀想な児」などの呼び名で呼ばれていることでお分かりのように、**悲劇の芽**がこの時から生じるのである。まことに最愛の子供を不慮の事情でなくした老齢の夫婦にとって、現代の社会事情でも多々見られるケースであると言えよう。実子(兄のHindleyと妹のCatherine)のある家族の中に、血族関係のない人間を、**養子縁組的な状態**にて家族の一員として迎え入れた場合の家族環境の変化を、想像してみよう。あらゆる悲劇的なケースが想定できる。**自意識**が育ちつつある兄妹愛の仲に、**今は亡き長兄の名**を持った他人が加わるケースである。その状態に、彼らの**父親の過大なる庇護**が加わるケースを想定してみたい。長兄の名を持ったHeathcliff, Catherine,そして兄Hindleyの**兄妹&義兄妹の人間関係**が存在することになる。この家庭において、どのような感情面の変化が起る

のかを検証してみたい。彼らの家族は、周辺の家族からみて一風世間離れた家族にとらえられている。さらに地勢的な状況として、屋敷は孤高的な高台にあり、まるで近隣からは隔絶されたような環境にある。年柄年中、北風は吹きすさび、下界から途絶されたヨークシャー地方独特の住環境に、アーンショ家は位置している。こんな住環境の中で彼らの家庭内における立場と力関係がどのように変遷するかを検証してみたい。

"'T' maister nobbut just buried, and Sabbath nut oe'red, und t' sahd uh't gospel still i' yer lugs, and yah darr be laiking! shame on ye! sit ye dahn, ill childer! they's good books enough if ye'll read 'em : sit ye dahn, and think uh yer sowls!" < 50 >

「**旦那様のお弔いはやっとすんだばかりだし、安息日はまだ終わっておらず、福音の響きはお前さんらの耳にまだ残っているというのに、～**」

"'Maister Hindley!" shouted our chaplain. "Maister, coom hither! Miss Cathy's riven th' back off 'Th' Helmet uh Salvation,' un' Heathcliff's pawsed his fit intuh t' first part uh 'T' Brooad Way to Destruction!" It's fair flaysome ut yah let 'em goa on this gait. Ech! th' owd man ud uh laced 'em properly - bud he's goan!" < 50 >

「**ヒンドリーの旦那様！と私達の牧師役は叫んだ。旦那様、来てください！キャシー様は<救生の鉄兜>の背を打っちゃうし、ヒースクリフは<滅びの大道>の上巻を足で蹴飛ばしましたよ！**」

子供たちの中でも殊のほか目を掛けられ過大な労わりと愛情を受け続けるヒースクリフは、何時しか「**大人の関心を惹きつける術**」を学んでいるのである。義兄に当たるヒンドリーとの確執の中での「**生き抜く術**」と表現しても良いものである。簡単に申せば、「寄らば大樹の陰」に相当するものであり、老齡の義父の生存中の「**生き抜く術**」と言えるものである。しかしながら、その大樹が消滅した場合のヒースクリフの存在たるや、急転直下に「天国から地獄」に貶められる存在になるのである。義兄のヒンドリーに蔑まれて、**家族の一員の立場（天国）から使用人の境遇（地獄）**に追いやれてしまうのである。わずかなる救いは、幼き頃より荒野の岩場（ペニストンの岩場）で**自然児**そのままに遊び戯れあった幼馴染のキャサリンに縋るしか、家庭内での彼の生き場（行き場）はないのである。しかしながら、擬似的で幼き無知なる行為を彼等は実行するのである。すなわち、**<救生>と<滅び>**を暗示する**観念的な書物（知的階級への道）**を自から放棄する行為によって、彼らは今後の行き方に一抹の不安を与えるのである。

"'Miss Earnshaw? Nonsense!" cried the dame; "Miss Earnshaw scouring the country with a gipsy! And yet, my dear, the child is in mourning - surely it is - and she may be lamed for life!"

"'What culpable carelessness in her brother!E exclaimed Mr. Linton, turning from me to Catherine. "I've understood from Shielders" (that was the curate, sir) " that he lets her grow

up in absolute heathenism. But who is this? Where did she pick up this companion? Oh! I declare he is that strange acquisition my late neighbour made, in his journey to Liverpool! a little Lascar, or an American or Spanish castaway." < 77 >

「アンショウ様のお嬢さん！まさか？」と奥さんが叫んだ。「アンショウお嬢様とこのジブシーが一緒にうろつきまわるなんて！だが、なるほど、**あの子は 喪服を着ているみたいよ！**」

最も近い隣人のリントン家とアンショウ家との初めての関わりの場面である。リントン家の家族がキャサリンを"Miss Catherine", "the child"の**呼称語**を使い分けている。喪服のような汚れきった黒っぽい服装を見て、おもわず口から洩れ出た言葉であろうが、話者の心理を伺い知れるシーンとなる。即ち、最初のMiss Catherineは「敬称語」であり、次のChildは「蔑称語」に相当する。リントン家のヒースクリフに対する**蔑称的呼称表現**(a little Lascar, or an American or Spanish castaway)も含め、当時のイギリス社会の生活観と**階級社会の世相感**を感じ取ることが出来る。呼称表現に格差社会の現実が色濃く示されている差別的実例である。今日の日本社会の派遣業務とサービス残業を含む格差社会の実態ととても酷似していると言える。

Cathy stayed at Thrushcross Grange five weeks: till Christmas. By that time her ankle was thoroughly cured, and her manners much improved. The mistress visited her often in the interval, and commenced her plan of reform by trying to raise her self-respect with fine clothes and flattery, which she took readily; so that, instead of a wild, hatless little savage jumping into house, and rushing to squeeze us all breathless, there lighted from a handsome black pony a very dignified person, with brown ringlets falling from the cover of a feathered beaver, and a long cloth habit, which she was obliged to hold up with both hands that might sail in. Hindley lifted her from her horse, exclaiming delightedly, 'Why, Cathy, you are quite a beauty! I should scarcely have known you: you look like a lady now. Isabella Linton is not to be compared with her, is she, Frances?' 'Isabella has not her natural advantages,' replied his wife: 'but she must mind and not grow wild again here. Ellen, help Miss Catherine off with her things' Stay, dear, you will disarrange your curls! let me untie your hat!' < 79 >

「親、キャシイ、お前はまったく美人だよ！見違えるようになった。**まるで貴婦人みたいだ。ねえフランセス、あのイザベラリントン**など比べものにならないじゃないかな？」

神はこの在所にある2軒の豪農を**対比的**に登場させている。一つは、この周辺一の豪農であったWuthering HeightsのEarnshaw家である。もう一つはThrushcross GrangeのLinton家である。このLinton家はキャサリンが世話になっていて、この地方でも名士に数えられる知的で裕福で円

満なる家庭である。文字通り、スラシュクロスとは「鳥などの小動物の囀る屋敷」のことで、明るい家庭で、文化水準が高く、いろんな階層の人が「寄り集まる家庭」として描かれている。⁷⁾

このように、この両家は当時の階級社会の中でも、特に「対極の家庭」として描かれている点に興味深い。Earnshaw家を取り巻く丘は波のように果てしなく起伏し、荒野のごつごつした岩の間にヘザー（ヒース：heather, heath）という低灌木が自生していて、夏には紫の花をつけ、冬には寒風が吹きすさび、「人を寄せつけない」厳しい茨の趣を与えている。

次の会話文から、キャサリンの感情の起伏をなぞり、彼女の愛の原型を追い求める。

Cathy, catching a glimpse of her friend in his concealment flew to embrace him; she bestowed seven or eight kisses on his cheek within the second, and then stopped, and drawing back, burst into a laugh, exclaiming, 'Why, how very black and cross you look! and how - how funny and grim! But that's because I'm used to Edgar and Isabella Linton. Well, Heathcliff, have you forgotten me?'

She had some reason to put the question, for shame and pride threw double gloom over his countenance, and kept him immovable.

' Shake hands, Heathcliff,' said Mr. Earnshaw, condescendingly; ' once in a way, that is permitted.'

' *I shall not,*' replied the boy, finding his tongue at last; ' *I shall not stand to be laughed at.. I shall not bear it!*'

And he would have broken from the circle, but Miss Cathy seized him again.

' I did not mean to laugh at you,' she said; ' I could not hinder myself:

Heathcliff, shake hands, at least! What are you sulky for? It was only that you looked odd. If you wash your face, and brush your hair, *it will be all right: but you are so dirty!*' < 80 >

「いやだ」とその少年はとうとう口を開きました。「僕は笑いものになるのはやりきれない。そんなことされてたまるもんか！」

「それでいいじゃないの。でもあんたはずいぶん汚くないのね！」

わずか五週間ばかりのスラシュクロスでの滞在であったが、キャサリンの言葉遣いには、内面的な変貌振りが如実に表現されている。成長著しく好奇心溢れる少女にとって、刺激的で異次元とも感じられる他人の家庭での生活体験は、不可能を可能にするに充分な感化となつて、彼女の言動そのものを変貌させたのである。彼女とヒースクリフとの会話には、その自意識的で自己中心的な以前には見られない言動が備わっているのである。例えば、ヒースクリフに対して、『顔を洗い、髪に櫛を入れれば、それで済むことじゃない。せやけどあんたは、ほんまに汚れているのね!』と、スラシュクロス家の家風的な生活価値観で話しかけることになる。その立ち居振る舞いと言葉の綾が、ヒースクリフの尊厳を著しく傷つけることになるのだが、キャサリンはこの根本的な過ちに全然気づいていないのである。

彼女の発する自己中心的な心情の吐露に対して、ヒースクリフは思わず、「I shall not. I shall not stand to be laughed at. I shall not bear it!」と反論するのである。‘I shall not’は‘I can not’よりも話者の魂的な心情論の表現に近く、彼の強い頑固な内面心理を表現する場面となっている。さらに、‘not stand’‘not bear’の同義語が、彼の自己主張の代弁語として、その役割を果たしている。

And should I always be sitting with you? ' she demanded, growing more irritated. 'What good do I get? What do you talk about? You might be dumb, or a baby, for anything you say to amuse me, or for anything you do, either!'

'You never told me before that I talked too little, or that you disliked my company, Cathy!' exclaimed Heathcliff in much agitation.

It's no company at all, when people know nothing and say nothing,' she muttered.

Her companion rose up, but he hadn't time to express his feelings further, for a horse's feet were heard on the flags, and having knocked gently, young Linton entered, his face brilliant with delight at the unexpected summons he had received. Doubtless Catherine marked the difference between her friends, as one came in and the other went out. The contrast resembled what you see in exchanging a bleak, hilly, coal country for a beautiful fertile valley; and his voice and greeting were as opposite as his aspect. He had a sweet, low manner of speaking, and pronounced his words as you do: that's less gruff than we talk here, and softer. < 96 >

「そんなら私は始終あなたと一緒にいなくちゃならないの？」

「まるで唾か赤ん坊と同じことだわ！」

「僕があまり話が少ないとか、僕の相手になるのは厭だとか、そんなことは今までに言ったことはないじゃないか？」

「何、にも知らないし、何にも言わない相手がどこにあるの？」

「彼女の連れ、は立ち上がったけれど、もう自分の感情を表わすことができませんでした」

「むろんキャサリンは入ってきた友と、出て行った友との差異を認めたのに相違ありません」

「彼の声と挨拶もまた風采と同じく反対でした」

リントン家にて、家風・身だしなみ・心構えなど、上流階級的な家庭教育を受けたキャサリンにとって、アンショオ家にて下男同然に扱われているヒースクリフとの関係は、上記に述べている如くに、まったく正反対、opposite、となり、まったく違って、differenceの關係に立ち至るのである。日々の生活基盤が、自然との融和観を尊ぶヒースクリフに対し、家族の一員としての融和観を優先するリントン家の概念を学んだキャサリンとは、相容れぬ感情とか観念的な価値観の相違が、両者の間に介在することになる。もともと直情的な性格のキャサリンのこと、両者の和解と理解は容易なことではないのである。また反面、成長著しき青春期の若者にとって、キャサリンの

ような人格の変貌とか変質の事例は、古今東西とか時代性に関係なく、何処にでも、何時の時代でも、どのような環境でも、存在しうる凡例のひとつと考えるべきものである。今の自分と同様に、汚く見栄えもせず、下品なる言葉しか話せなかった「キャサリンの言動の変貌振り」を見せ付けられ、当のヒースクリフは戸惑い苛立つばかりである。彼はただ戸惑う他に仕方がなかったのである。一方、キャサリンは、「親友であり伴侶であるヒースクリフの存在」を、上記の文章内でも4通りの呼称で表現している。まず、you company companion friend youと使い分けているのである。「親密的から、客観的へ、また親密的な表現」にと区別して使い分けている。この英語表現形式は、現代文に十分に通用する実用的な用例である。

'This is nothing,' cried she: *'I was only going to say that heaven did not seem to be my home; and I broke my heart with weeping to come back to earth; and the angels were so angry that they flung me out into the middle of the heath on the top of Wuthering Heights; where I woke sobbing for joy.* That will do to explain my secret, as well as the other. *I've no more business to marry Edgar Linton than I have to be in heaven; and if the wicked man in there had not brought Heathcliff so low, I shouldn't have thought of it. It would degrade me to marry Heathcliff now; so he shall never know how I love him: and that, not because he's more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same; and Linton's is as different as a moonbeam from lightning, or frost from fire.'*

Ere this speech ended, I became sensible of Heathcliff's presence. Having noticed a slight movement, I turned my head, and saw him rise from the bench, and steal out noiselessly.

He had listened till he heard Catherine say it would degrade her to marry him, and then he stayed to hear no farther. My companion, sitting on the ground, was prevented by the back of the settle from remarking his presence or departure; but I started, and bade her hush!

'Why?' she asked, gazing nervously round < 106 - 107 >

「私が言おうと思ったことは、天国は私の住む家ではなさそうだったというだけなの。そして、私は地上に帰りたくて胸が張り裂けるほど泣いたの。すると天使たちが大変怒って、私をバザリング・ハイツの天辺のヒースの藪の中に放り出したの。」

私はそこであまり嬉しくなってすすり泣きして目が醒めたわ」

「私は天国に行く必要が無いのと同じように、エドガー・リントンとの結婚にも用がないわ。向こうの部屋にいる意地悪なお兄様がヒースクリフをあんなに下品、degrade、にさえしなかったら、私はエドガーと結婚するなんて考えなかったのに。私は今結婚すれば、私は品が下がるでしょう。だから私がどんなに彼を愛しているか彼に知らさずにおきましょう。私が彼を愛するのは綺麗だのなんのというためではなく、私以上に私自身だからなの。」

私達の魂が何から出来ていたにせよ、私とあの人のとは同じものです。リントンののは全然、別物なんです。まるで稲妻と月光、火と霜みたいに違っていいよ！」

「この話が最後まで終わらないうちに、私はヒースクリフがこの部屋にいることに気づいたのです。微かな物音に振り返ってみると、ヒースクリフが腰掛から立ち上がって、こっそり部屋から出て行くのを見つけたのです。」

これからのヒースクリフとキャサリンには、「有為転変の激変的な人生上の宿命ドラマ」が展開されるのであるが、上記の場面前後は彼らの今生的な「人生上の分岐点」となる。キャサリンにとって、今の煉獄状態におかれているヒースクリフとの人生の打開に向けて、ヒースクリフとの霊的合体に向けて、そしてその崇高で殉教的な彼らの目的に向けて、彼女の口から発せられた精神の吐露（リントンとの犠牲的結婚）の内容は、このストーリーの悲劇的なメクドラマの出発点となる。

人生経験の多寡によって、また意思疎通の不完全さによって生じたる誤解が、想像しがたい煉獄の苦しみと様々な波紋を巻き起こすのである。ストーリーテラーのネリーはキャサリンを次のように諭しながら述べている。現代から観れば、若き頃の小宇宙的な恋を語り合う多感なるカップルを前にしての次の諭しは、酸いも甘いもかぎ分ける先人の言葉になる。

'I see no reason that he should not know, as well as you,' I returned; 'and if you are his choice, he'll be the most unfortunate creature that ever was born! As soon as you become Mrs. Linton, he loses friend, and love, and all! Have you considered how you'll bear the separation, and how he'll bear to be quite deserted in the world? Because, Miss Catherine' <107>

「彼にその理由を知らせないって、私には解りませんよ」

「彼の恋人として想っていたら、」

「最も不幸な者 = 生き物 = 恋人から捨てられし、空蝉のもの」

「リントン婦人になりし場合は・・・」

「友、愛、森羅万物すべて」

「君が耐えられても、この世に見放されし彼が、果たして耐えられるか？」

「未婚の今なら、キャサリンよ！」

この文章でshould not knowがキーワードになっている。will, may, canなどよりもshall(should)の表現技法そのものが、重要なキーポイントであり、話者の強い意思を示したり、義務を示すのに位置づけられている。格差社会の今日、心理面から見る人称の呼称表現は意味深いものである。例えば、「仲間」を示すchoice, creature, friendなどは誠に重き役回りを演じている。

上記の文中のdeserted（見捨てられる）の心理は、人間の根源的な価値を訴えている場面であり肝要な場面と考えるべきである。さらに「知らせないこと」が二人の間に深刻な影響力をもた

せることになる。結果論にもなるが、このことが両者の傷口を拡げてしまい、修復不可能な心理状態に追い込むことになるのである。

He quite deserted! we separated! she exclaimed, with an accent of indignation.

'Who is to separate us, pray? They'll meet the fate of Milo! Not as long as I live, Ellen: for mortal creature. Every Linton on the face of the earth might melt into nothing, before I could consent to forsake Heathcliff. Oh, that's not what I intend ÷ that's not what I mean! I shouldn't be Mrs. Linton were such a price demanded! He'll be as much to me as he has been all his lifetime. . . . Nelly, I see now, you think me a selfish wretch; but did it never strike you that if Heathcliff and I married, we should be beggars Whereas, if I marry Linton, I can aid Heathcliff to rise, and place him out of my brother's power' . . . < 107 >

「彼がまったく捨てられるって！私たちが別れられるって！いったい誰が私たちを離すんですって！」と彼女は憤ったように叫んだ。」

「しかし、リントンと結婚すれば、私はヒースクリフを助けて、お兄様の呪縛から独立させてあげることができるのじゃないの？」

この会話文では「～られる、～してあげる」的な自己愛の押し付け的な表現に注目しなければならない。10代の頃の犠牲的な愛情表現特有の感情であり、現代にも通じるものである。結婚というものを、現代の宝塚的なナルシズム風に捉えているものである。エドガー一家と社会的民法的に手続き（結婚）することによって、ヒースクリフをアーンショウ家から自由にさせられる感情によるものである。この時のキャサリンには、結婚による肉感的悦びとか精神的歓びというよりも、家族的な世俗的な喜びによって、自分にもさらにヒースクリフにも「～られる、～してあげる」感情に浸りたい自己欲望「虚栄心+犠牲愛」への達成感を追い求めているのである。この時点でのエドガーとヒースクリフの両者に対するキャサリンの感情は、決して同一のものでないことを理解し認識しておくべきである。

This is for the sake of one who comprehends in his person my feelings to Edgar and myself. I cannot express it; but surely you and everybody have a notion that there is or should be an existence of yours beyond you. What were the use of my creation, if I were entirely contained here? My great miseries in this world have been Heathcliff's miseries, and I watched and felt each from the beginning; my great thought in living is himself. If all else perished, and he remained, I should still continue to be; and if all else remained, and he were annihilated, the universe would turn to a mighty stranger: I should not seem a part of it. My love for Linton is like the foliage in the woods: time will change it, I'm well aware, as winter changes the tree. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath: a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I am Heathcliff! He's always, always

in my mind: not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being. So don't talk of our separation again: it is impracticable; and - ' < 108 >

「これは私がエドガーに対する感情と、私自身に対する感情と、この両方を一身に含んでいる人なんですもの」

「お前だって誰だって**自分以上の自分が在り**、また**在らねばならぬはず**と考えますね！自分という考えが全然この身一つに含まれているだけなら、私に何の生き甲斐があって？」

「私の生きてゆくうえでの大きな心配もまたあの人のことなの。」

「他のものが一切滅んでしまっても、**彼さえ残れば私は依然として生きなえていくわ。**」

「ヒースクリフに対する私の愛は地の底の千歳の巖のように、見た目にはいいことはないけれど、なくてはならないものなの。ネリーや、**私はヒースクリフよ！**あの人はいつもいつも私の心においてよ。私自身が必ずしも私にとって愉快なものじゃないのと同様に、**あの人も愉快なものとしてでなく、わたし自身として私の心においてよ。**だから**あの人と別れるなんていっちゃいや** - とてもできない話だもの。そして…」

I should still continue to be; (彼さえ残ればわたしは生きながらえていくわ)のshould は、キャサリンの精神的というよりも霊的な信念を感じさせる最も重要なキーワードであると考えられる。その裏づけとしては、an existence of yours beyond you (自分以上の自分が在り、また在らねばならぬ)との概念には、儒教的な**招魂復魄**の「魂と魄」の心情が垣間見れるのである。「魂と魄」が合体しておれば、あの世でもまたこの世でも、両者の存在 (to be) はありえることに繋がるのである。これはまさしく**輪廻転生のな普遍性**そのものである。

'Und hah isn't that nowt comed in frough th' field, be this time? What is he abaht? Girt eedle seeght!' demanded the old man, looking round for Heathcliff.

'I'll call him,' I replied. 'He's in the barn, I've no doubt.'

I went and called, but got no answer. On returning, I whispered to Catherine that he had heard a good part of what she said, I was sure; and told how I saw him quit the kitchen just as she complained of her brother's conduct regarding him. She jumped up in a fine fright, flung Hareton onto the settle, and ran to seek for her friend herself; not taking leisure to consider why she was so flurried, or how her talk would have affected him < 109 >

「あの阿呆奴が今時分になって何だって**野良**から戻ってこないのかのう？ いったい何をしているんだろう？ ふとい怠け野郎だ」とジョーゼフ老はヒースクリフを探して辺りを見回しながら言った。

キャサリンに向かって、彼がさっきの話をここで聞いていたに違いないこと、そして**ヒン**

ドリーの彼にたいする仕打ちがあんまりだという彼女の話が始まる時に、この台所から出て行ったことを小声で打ち明けました。キャサリンは非常に驚いて、ヘアトン坊やを長いすの上に放り出したまま、すぐさま自分で友達を探しに行った。

彼女自身何故そんなに慌てるのか、また自分の話がどのくらいヒースクリフを落胆させたか、そういうことを考えてみる余裕などてんでなかったのです。

キャサリンの不用意でやんちゃ(?)な告白の一部だけを聞きかじって、その場から居なくなったヒースクリフの動向を、ネリーから聞いたキャサリンの驚き慌てる状況描写の場面である。口は悪いが、陰ながらヒースクリフのことを親身になって心配するジョーゼフには、灰汁のある方言が似合っている。果たして、キャサリンの告白は「やんちゃな」なものなのかはつぎの独白文が彼女の移ろいやすき心情を暗示している。彼女にとってのSalvation(救い)の存在であるヒースクリフを心から想いながら、**思わぬ展開**(destruction=滅び)にと移行する。その後の二人の愛は愛の変形の「憎悪」→「復讐」の第二幕へと進むのである。

・まとめ

'I wonder where he is I wonder where he can be! What did I say, Nelly? I've forgotten. Was he vexed **at my bad humour** this afternoon? Dear! Tell me what I've said to grieve him? I do wish he'd come. **I do wish he would!**" < 109 >

「まあ、あのひとはどこにいるのかしら。一体どこに居られよう。ネリーや、わたしさっき何をしゃべったの? 忘れちゃったんですもの。わたし今日の昼過ぎは、**やんちゃだったんで**、怒ったのでしょうか? ねえってば! 私、あの人の気に障るようなことを、何かいったかどうか教えて頂戴。帰ってくれるといいわね! 帰ってほしいわ!」

ここでのキーワードは、bad humorである。この場合の彼女の心理は、humorの四体液(blood, phlegm, yellow bile, black bile)のうち、black bile(=bad temper=胆汁)の作用によるものである。彼女の場合、phlegm(粘液的性質のうち、遅鈍、無精、無感動の体質)は少なく、blood(血液=血気盛ん、お洒落、感情的、家系、名門の体質)が多いのである。

いっぽうのヒースクリフにはyellow bile(嫉妬深い、妬みぶかい体質)とblack bile(不吉な、憂鬱な、陰悪な体質)がみられる。

Bad humorのbadは(=感情的、気まぐれの)なる体液の心理状態なのである。

さらにもう一つのキーワードにI do wish he wouldがあげられる。この表現は仮定法過去の範疇に属するのであるが、「Subjunctive Past= 現在の事実に対の仮定、 現在または未来についての仮定、 現在の事実に対の願望」のうち、「現在の事実を肯定しつつ、適うなら戻ってきてほしい」という感情を垣間見れるのである。しかし、doを続けて使用しているところに、彼女の「気まぐれのbad humor」の体液を感じる。

ここに「キャサリンからみる愛の終焉」を感じ取るのである。

作者エミリー・ブロンテは、この作品『嵐が丘』の中で、「四つの愛の原型」を提示している。その一つは、『野生的な愛の願望』= ヒースクリフとキャサリンとの愛。ヒースの藪 & ペニンストンの丘でのみ成就する愛の原型。

My love for Heathcliff resembles *the eternal rocks* beneath: a source of little visible delight, but necessary. < 108 >

その二つは、『打算的・虚栄的な愛の虚構』= キャサリン・アーンショウとエドガー・リントンとの愛。Humor的にはblood typeからYellow bile type (虚弱的精神的疾患・精神的崩壊への萌芽・序章) の原型。

My love for Linton is like the *foliage in the woods*; time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees. < 108 >

その三つは、『犠牲的・強制的な愛の構築』= リントン・キャサリンとリントン・ヒースクリフとの愛。Humor的には、凝縮的なYellow & Black bile (リントン家そのものに対する怨念的破滅的愛) の原型。

' I am afraid now,' she replied; ' because if I stay, papa will be miserable, and how can I endure making him miserable - when he - Mr.Heathcliff, let me go home! *I promise to marry Linton:* papa would like me to, and *I love him* - and why should you wish to force me to do what I'll willingly do of myself?' < 289 >

(この最後の部分のか弱きリントン・キャサリンの言葉には、犠牲的環境を甘受し、親子の愛を追い求めるところから生まれた意志の強さを感じるのである。)

その四つは、『社会的・建設的な愛の構築・萌芽の機運』= キャサリン・ヒースクリフ (キャサリン・アーンショウ) とヘアトン・アーンショウとの愛。Humor的には、堅実的で社会的にも積極的に関与しようとするblood type (血気盛ん、情熱的、元気) の原型。

' I didn't know *you took my part,*' she answered, drying her eyes; ' and I was miserable and bitter at everybody; but, *now I thank you, and beg you to forgive me,* what can I do besides? < 326 >

「滅び」と「救済」の本をそれぞれかなぐり捨てて、ヒースの藪で二人の人生を謳歌しようとした母親の愛の世界に対して、娘とヘアトンとの愛の熟成の姿は、皮肉にも本を通じて、友情が

愛情に転化し昇華したところに、ironical humanity とSalvationを感じるのである。またこの世の中に対する贖罪の心と輪廻転生のあるべき姿を、作者エミリー・ブロンテは示唆しているのである。

さらに、作者ブロンテは、キャサリンでは自然を愛し、自然の中で生まれる素朴な愛の大切さは尊重しつつ、女性の直情さに対して、アイロニカルパッシングを与えたと思われる。娘のキャシーでは時代を見る革新さ、世界に目を向けた柔軟なる人間変革そして知的な夫婦愛に、さらには女性として夫唱婦随（婦唱夫随ではない）への思いやりと気配りの心に対して、安寧と希望と贖罪を与えたと思われる。この感覚は現代の「心の虚しさと乾いた社会倫理」に、潤いある一条の光明を与える最もふさわしい題材であると思う。

註

- 1) 青山誠子・中岡 洋：「ブロンテ研究」（開文社、1958）p.339
- 2) Ibid: p.p806～807
- 3) 大和資雄：「嵐が丘」（角川書店、1963）p.p 456～468
- 4) 武久文代：「嵐が丘」における色彩的表現とその象徴について（奈良大学紀要、第16号、p.p.39～54）
- 5) *Wuthering Heights* By Emily Bronte(Collins Classics,1960)
- 6) 中野好夫・大和資雄訳：「世界文学大系、28、嵐が丘」（筑摩書房、1960）
- 7) 山田隆敏：「嵐が丘にみる作品構成の諸相」（奈良大学紀要、第24号、1996、p.p.81～87）

参考文献

- 1) *Wuthering Heights by Emily Bronte* (Collins Classics, 1960)
- 2) Crandall, Norma: *Emily Bronte, A Psychological Portrait* (New Hampshire: Richard R. Smith Publishers,Inc.,1957)
- 3) Muir, Edwin : *The Structure of the Novel* (London : Hogarth Press, 1928)
- 4) Winnifrith, Tom: *The Brontes and Their Background, Romance and Reality* (London: Macmillan, 1977)
- 5) 廣岡英雄：「英文学の方言」（篠崎書林、1978）
- 6) 世界文学大系 28「オースティン・ブロンテ」（筑摩書房、1960）
- 7) 細江逸記：「英国地方語の研究」（篠崎書林、1956）
- 8) 青山誠子・中岡洋：「ブロンテ研究」（開文社出版、1983）

Summary

It is easy for us to find words such as powerful and agony to tell the feature of *Wuthering Heights*, but not quite so easy to explain precisely the source of affections and loves to describe the shapes of *Wuthering Heights*.

In this paper, abundant examples of affectionate & impulsive expressions in *Wuthering Heights*, Emily Bronte's masterpiece, are used particularly on emotional effects between Catherine-Heathcliff, and Cathy-Hareton